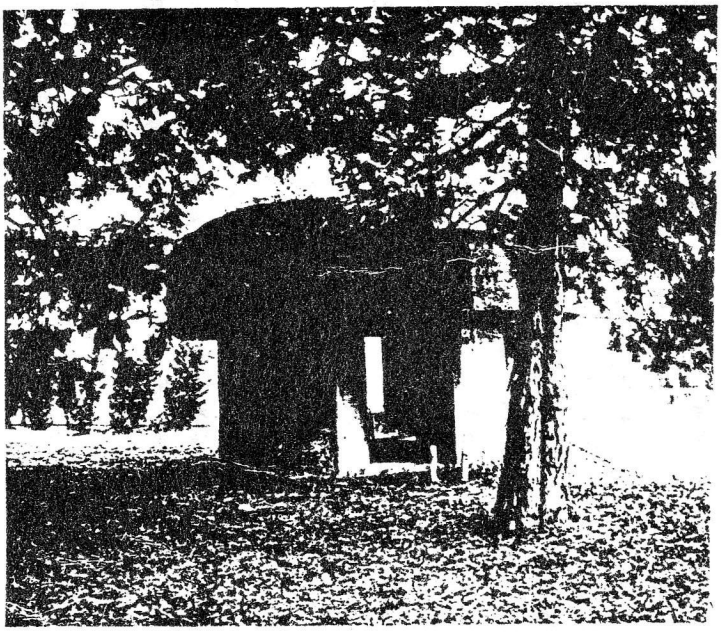
日吉台地下壕保存の会
会　報

第２号
発行　日吉台地下壕保存の会
編集　事務局
〒２２３
横浜市港北区下田町３－１５－２７
ＴＥＬ　044-62-1282（寺田貞治方）



３０ｍ下にある地下壕に続く竪穴の上部，上部の建造物は１トン爆弾にも耐えられるといわれる。

目　次

○日吉台地下壕保存の会の活動　1
○第二回幹事会報告　2
○第一回運営委員会報告　2
○第三回幹事会報告　2
○お知らせ
ビディオによる学習会　2
○地下壕の保存に向けてプロジェクトチームが発足　3
○地下壕に生息する生物　3
○日吉台地下壕探検と追想　4
○入会案内　4
○日吉台地下壕を探索して　5
○日吉台地下壕について　6
○編集後記　6

日吉台地下壕保存の会の活動

事務局長　寺田貞治

保存の会発足以来、今日まで私達は幹事会を三回、運営委員会を一回持ち、その間会報第一号の発行、ゼミナールや見学会を開催したり、慶應の学生を対象に講演会を行ったりしました。

保存の会の活動も、大きな拡がりを見せてきました。入会者も増え、七月十二日現在で二百八名となりました。

保存の会の活動については、テレビ・ラジオでも放送され、大きな関心を呼んでいます。

さらに、私達にとって明るいニュースとして、港北区役所内に地下壕の保存に向けてプロジェクトチームが発足しました。

今後とも保存の会の事業達成のため、ご支援の程をお願いします。

第二回 幹事会報告

五月十八日に慶應義塾新研会議室で開かれ、事務局長の報告の後、幾つかの議題について討議した。

①会報第一号について、字が少し小さくて読みずらいという意見もあったが、この形式でしばらく続けることになった。②会報第二号を七月上旬に発行する。③横浜市地域研究補助金について、来年までに検討する。④調査活動については聞き取る相手のリストを作る。未調査地域の実地調査、文献調査などに取り組む。⑤顧問は当分委嘱しない。

幹事会終了後、「日吉台地下壕について」のゼミナールが一時間半にわたってもたれた。

第一回 運営委員会報告

六月十六日に慶應義塾藤山記念館大会議室で開かれた。事務局長より先ず幾つかの報告があった。

①五月二一日の地下壕見学会参加者は約三十名。地下壕入口の農家の人は、見学を迷惑がっているので何らかの対策が必要。②テレビ報道について。五月十七日NHKの七時三五分にモーニングワイドで放映。五月二五日NHKFM横浜で午後六時より十分間放送。六月八日日本テレビの午後七時から「追跡」で放映。③港北区区政推進課では「日吉台地下壕利用計画策定調査」を今年度の重点事業の一つとしてやる予定である。推進母体は、日吉台地下壕保存の会・コンサルタント・港北区役所からなり、これらで、プロジェクトチームを組み、活動を進める。六月二一日に打合せ、六月三十日プロジェクトチーム初会合。

次に幾つかの議事について討議した。

①プロジェクトチームに保存の会から参加する人は、永戸会長・田辺副会長・寺田事務局長・茂呂幹事・比留間幹事の五名に決定した。②調査活動について、地域関係は日吉台中学で、海軍・慶應関係は慶應で聞き取り調査を行う。③八月五日（土）にビデオによる学習会をやる。

第二回 幹事会報告

七月七日に慶應義塾藤山記念館中会議室で開かれた。

報告事項　事務局長より

①会報第二号の発行が遅れている。②区役所のプロジェクトチームの初会合の報告（別掲）。③保存会関係のニュースとして、NHK第一ラジオで六月二六日午後一時五分「各地の話題」で十分間放送。慶應義塾の「塾」六月一日発行第三号、「塾生新聞」六月十日発行第二二四号、「三田評論」七月一日発行第九〇五号などに掲載④細谷保治氏が幹事を辞退。

議事

①八月五日（土）午後四時より、慶應義塾大会議室で、ビデオによる学習会を開く。②七～八月中に地下壕の実地調査をやる。

★お知らせ ビデオによる学習会

日時　八月五日（土）午後四時より

場所　慶應大学藤山記念館大会議室（日吉駅東口徒歩三分）

内容　テレビ朝日・日本テレビ・NHKテレビで放映したビデオと、未放映のビデオを含めて一時間半にわたって、地下壕の様子を見たり、元連合艦隊の参謀や農家の人の証言を聞いたりすることができます。

参加　どなたでも参加できます。お誘い合せの上、多数の方々の参加をお待ちしております。

地下壕の保存に向けてプロジェクトチームが発足

横浜市港北区役所より、日吉台地下壕保存の会に、日吉台地下壕利用計画策定調査をプロジェクトチームを組んでやりたいので、保存の会から五名ほど推薦して欲しいとの依頼があった。

早速、六月十六日に運営委員会を開いて、永戸会長・田辺副会長・茂呂幹事・比留間幹事・寺田事務局長をプロジェクトチームのメンバーとして選出した。

プロジェクトチームの初会合が去る六月三十日に開かれた。日吉台地下壕利用計画策定調査（案）を中心に討議された。この案の主な項目と内容は次の通りである。

一、趣旨

横浜市は第二次世界大戦で、空襲などの被害を受け、戦後も長期に渡って接収されるなど、市民生活は大きな影響を受けている。しかしながら、こうした歩みを知ることのできる施設が横浜市にはない。戦争体験者の高齢化が進み、都市開発によって当時の遺物が失われつつある現在、早急にこの記録を残し、遺物の保存を進めることが必要となっている。

日吉台地下壕は、当時の連合艦隊司令部として実際に使われていた貴重な戦争の記録であり、一部が埋められているものの、構造物がそのまま残されている。そこでこの地下壕を保存することができるか、また、どのような活用法があるのか検討する。

二、検討項目

○地下壕の状況調査

地質調査、コンクリートの強度、土砂・地下水の度合いとその除去

○地下壕の当時の状況調査

海軍関係者・住民など関係者からの聞き取り調査、米軍資料・空襲記録の調査

○現在の状況

日吉地区の特性、将来像、権利関係、地元の意向、入口の確保、遺物の収集

○管理運営方法

市の計画との整合性

○その他

他の地下壕の状況、PR活動

三、推進母体

日吉地下壕保存の会、コンサルタント、港北区役所（調整係・区民相談室・建築課）からなるプロジェクトチームを組み、調査方法の検討や地下壕の基礎調査を行う。事務局は区政推進課調査係とする。

四、今年度の取り組み方

プロジェクトチームにより日吉台地下壕の当時の状況を把握するとともに、現状を把握し、基礎資料を作成する。また、懇話会で活用方法などを検討する。

①懇話会の開催

地下壕関係者、地域の代表者、有識者からなる懇話会を開催し、地下壕の保存、活用の方法や問題点を検討してもらう。年四回程度を予定。

②地下壕関係者からのヒヤリング

③地下壕の全容調査

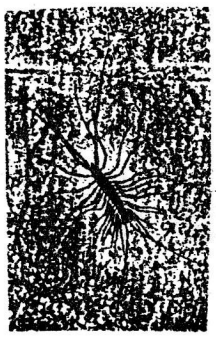
④他地域の地下壕調査

⑤調査報告書の作成

以上の案をもとに、聞き取り調査・懇話会・地下壕保存・資料の調査など、今後の進め方について討議がなされた。

具体的には七月十四日に、元海軍省経理局主計課士官で現師岡町内会長の千葉朝夫氏からのヒヤリングを実施する。また保存の会主催の八月五日のビデオによる学習会に参加することが決まった。

地下壕に生息する生物



○天井にうごめくゲジゲジ

○壁にへばりつく菌類の仲間

日吉ロム口地下壕 探検と追想

船山登美子

東京から横浜市民となり日吉の地で十年がたちました。この間慶應大学の地下に連合艦隊司令部の壕が縦横無尽に掘られその歴史の遺物が現存しているのを初めて知り、その実態を知るべく「地下壕保存の会」に参加、そして五月二一日希望通り見学会に同行することが出来ました。

雨空の当日は集合時より小雨であったにも係らず老若男女三十名程が参集、滑り易い坂道を恐る恐るたどりついた農家の庭先の「此処が入口です。」と言われ、予想外に立派なのにびっくり、それと云うのも日支事変・満州事変と長年戦争状態を続けた結果での大東亜戦争「こんな小さな国が大国のアメリカと闘って大丈夫なのか？」と疑問を有していたのと物資不足は日常茶飯事であった時期にに流石軍隊だけの事があったと思ったのと、この入口が農家の玄関とは目と鼻の先の近い距離に設けられ、それが為に農家の方が四人も爆死されたと聞き、朝な夕なにこの場所の前を通っていられる農家の方はさぞ辛い日々であったろうと思うだに胸の痛む思いでした。

入口付近は現在農家の倉庫として利用され、その為に天井に設けられた蛍光燈が皓々と輝き、コンクリートの壁面を照らし出していた。進むにつれて中は真っ暗で各自が照らしだす懐中電燈で足もとを照らしながらの進行は異常な経験でした。司令長官の居所は特別広いスペースと丁寧な仕事振り、設営隊の兵はどんな思いで作業をしたのかと感慨一入（兵あっての軍隊なのに……）、道は右に左に迷路の様で、進むにつれコンクリートに滲みでた水分で天井から四～五十㎝の鍾乳石とその下に五～六㎝の石筍が立ち、周囲は石灰石の花が咲き、四十数年の時間の長さを思い知りました。通路は次第にぬかるみ、田圃の中を歩いている様で、マンホールの中に落ちないようにするのも一苦労、出入口は大部分土嚢で塞がれている由で、当時のものと思われる鶴嘴が放置されたままなのが生々しく胸がつまり、それと共に過去が思い出さました。

かって主人は慶應で学び、学徒動員で海軍に招集され、特攻隊員となったものの、エンジン不調で出撃出来ず陸上勤務となりました。部下を公用で長崎に出し、そこで部下は空襲を受けました。空襲を受けたまま戻らぬ部下を捜しに、終日瓦礫の中を歩き回った由で、当時これが原爆と知らず爆心地周辺を歩いた結果、異常な白血球の多さを後になって知り、結局二次原爆症と判明したものの「当時手帳を受けて置けば良かった。」と洩らしていたが、父の血液の異常は二人の娘に同じように遺伝し、種々の弊害を受け、「これが母体であったらどのような変化が生じたか」と思うとぞっとします。

この主人が学んだ校舎の地下を今妻が探検しているのも何かの因縁の様で、再び戦争を起こさぬ為にも今保存を手掛けねば、崩壊してしまうのは時間の問題と思い、平和への願いを込めて、一日も速く全容の調査と保存の事を推進して欲しいと痛感しました。

入会案内

入会するには

○申込書に必要事項を記入します。

申込書は事務局にあります。

○年会費は、個人千円（高校生以下五百円）、団体二千円

○郵便振込

（番号）横浜二－六二九九七

（加入者名）寺田貞治

入会したら

○会報が送付されます。会報では保存運動の状況をはじめ、地下壕の見学会、学習会、講演会などの案内、調査、研究の情報などを紹介します。

詳しいことは

○事務局までご連絡下さい。

日吉地下壕を探索して

元地下壕通信兵　鹿島光雄
（翻訳社経営）

去る八月二十三日（昭和六十一年）の土曜日、旧知の加賀谷さんのお誘いで神奈川県日吉台の地下壕探検に参加させて頂いた。急な崖の斜面に開いた小さな崩落口から身をくねらせてもぐり込んだ地下壕は私にとっては正にタイムトンネルだった。

ちょうど四十一年前、最後の海軍特別少年兵（特年兵）として暗号教育を了へ、終戦の年の七月半ばここ日吉の聯合艦隊司令部に配属されて八月末まで一ヵ月半を過した場所だった。暗号室、通信室、作戦室等のあったブロック、壁際に木製のベッドが並んでいた通路等々、当時十四歳だった自分自身については定かではないが、その夢のあとだけは厳然として存在していた。

十四歳といえば未だ子供だったろうが、毎日毎日が緊張の連続だった。私と北海道出身の岩渕君というのがよくなぐられた。私は多分要領が悪かったためで、又岩渕君はその不敵な面構えのせいかも知れない。はるか高い崖上のほう炊所から味噌汁のいっ杯入った木の桶を両腕にかかえて運ぶのは正に苦行だった。一度だけだがあの悪名高い精神注入棒を三発喰ったのを憶えている。恐ろしい痛さだった。あとで尻にさわってみると親指大のみみずばれが三本走っていた。

八月十五日は丘の上の庁舎前の中庭で「重大放送」をきいた。意味は分らなかったが、あとで上官にきくと戦争は終り、みんなそれぞれ自分の家に帰るのだという、その時の感情は名状しがたいものだった。それに何ともいえない解放感とそれに伴なう嬉しさだったのだろう。あとからあとからこみ上げて来る笑いを押さえるのに苦労したのをよく憶えている。

軍隊組織という巨大な鉄鋼構造物が瞬時にして消えさり、あとに無限に透明な八月の青い空だけが残っていた――そんな感じだった。それからしばらく暗号書などの書類の焼却で日をすごし八月末に復員した。

日吉台地下壕について

日吉台中二年　岡上そう

今は、「地歴探訪会」という部の部長として活躍しています。僕のやっている分野は地下壕ということで、壕のことや戦争の様子など、水、土曜日にこの部は活動しています。

何故、僕が地下壕に興味をもったかというと、小学校の四年生の時でした。僕の家の裏は慶応の山なので、草木があり、遊ぶのには最も適した所でした。そして、ある日、僕の友人の犬が山に逃げたので、つれ戻して欲しいというのです。よーしわかったと言って、一緒に遊んでいたT君と山のなかに侵入しました。藪かなと思って入ると中は結構草もなく、ひらけた所でした。そして、そこには犬がいました。T君と捕まえようとすると、やはり動物、捕まえようとすると逃げてしまうのである。山歩きに慣れていた僕達二人は、駆け出して必死になって追いかけました。するとそこには、とても立派な獣道がありました。僕達は驚きながら背を低くして小股で走りました。すると、目の前がパッと白くなり、明るさを感じました。そこは新幹線の辺りの階段の上にあたるところでした。犬は戻って行きました。――その夜、僕は感動しました。そこには未知の世界を知る事ができた喜びもありました。

翌朝。昨日の喜びを込めて親友のY・A君に、この事を話しました。その後、僕達の家の裏で遊ぶことに決めました。

三人で遊びました。山のなかで無茶なサッカーをしていたところ、一人がこぼして藪の中に入って行ってしまい、捜すと、そこに一メートルくらいの穴があいていて、その中にボールが入りました。わざわざ懐中電灯を持ってきて、恐る恐る入りました。五メートルほどのところにボールはありました。なんだか怖くなって、三人で急いで出てしまいました。

が、不思議なもので、その穴には言葉に表せない、わけのわからない魅力があって、その魅力に魅せられてしまい、何度も入るうちにだんだんその事実が知りたくなり、行動範囲を拡大し、いたる所に出入口があるか等を調べ、戦争中の事などをおばあさんから何度も聞いたり、本を読んでいるうちに、だんだん現状がわかるようになりました。

時は少し流れ、中一の時、茂呂先生に出会い、この連合艦隊の壕にもめぐり会えたわけです。中二の今、色々な戦争の資料や本を探しまわっているわけであって、まだまだ未熟な僕ではありますが、めげずにがんばっています。そこで日吉台地下壕保存の会に入り、希望の光が見えてきたわけであり、地歴探訪会でも、図々しく聞き取り調査を頼まれてしまったわけであるから、めげてる暇なんて無いッ！と、いう事で元バスケ部の僕はこうして日吉の町を飛び回っているので、地下壕保存の会の皆さん応援してください。

編集後記

◆七月上旬に発行する予定でしたが、結局遅れてしまいました。隔月毎に発行したいと思ってはいますが……。

◆活動は、これまでに幹事会三回、運営委員会一回、見学会一回、ゼミナール一回開かれ、区役所にプロジェクトチームもつくられ、順調に進んでいます。

◆日本テレビやNHKテレビ・ラジオで日吉台地下壕や保存の会のことが放送されたが、NHKテレビで終戦特集の中でまた放映されるかも知れません。今まではアッという間に終わったが今度はどうかな？

◆第一号は誤字も脱字も多く失礼しました。今後、十分気をつけますが何分にも素人集団ですのでご容赦願います。

◆事務局
〒二二三　横浜市港北区
下田町三－一五－二七
寺田貞治方
☎〇四四・六二・一二八二